

女性史の方法覚書 河野信子
 高群逸枝論 石川純子
 母系制の研究との出会い 寺田操
 私のなかの高群逸枝 村上信彦
 最後の人〈高群逸枝伝〉石牟礼道子

■たより
 ■編集室メモ

高群逸枝雑誌

創刊一九六八年

25

季刊 高群逸枝雑誌第二十五号
 一九七四年十月一日発行

責任者・橋本憲三

発行所・高群逸枝雑誌編集室

(郵便番号 03) 水俣市幸町六の一五
 振替東京四六八三三

定価一五〇円



全 10 卷

未開の分野に拓いた科学的女性史
 詩と真実の結晶・愛と学問の原典
 女性がはじめてうちたてた金字塔

- 第1巻 母系制の研究 三〇〇円
- 第2巻 招婿婚の研究 I 三〇〇円
- 第3巻 招婿婚の研究 II 三〇〇円
- 第4巻 女性の歴史 I 二八〇円
- 第5巻 女性の歴史 II 三〇〇円
- 第6巻 日本婚姻史・恋愛論 三〇〇円
- 第7巻 評論集恋愛創生 二八〇円
- 第8巻 全詩集日月の上に 二八〇円
- 第9巻 小説／随筆／日記 三〇〇円
- 第10巻 自伝 火の国の女の日記 二八〇円

菊判クロス装 上製本美貼函入
 全巻平均 520 ページ
 全巻揃定価 30,000円
 〈詳細内容案内書呈下25円〉

東京都新宿区 理論社 振替東京
 若松町一〇四 95736

高群逸枝全集

女性の歴史

第五刷
 七刷

若き世代の中に浸透しつつある彼女の全業績と人間像

女性の手になるすぐれた歴史書
 高群さんの女性史の研究は、学界において独歩の地位を占めている。今までの歴史はほとんどすべてが男性の手で書かれて来たために、女性の生活については、多くは同じであった。高群さんの研究には、女性自らの発見による問題が提起されている。女性の手になるが故にはじめて可能な領域開拓が行なわれたのである。
 「女性の歴史」は、これまで専門の論文にもつばら取り組んで来られた著者が、ひろく大勢の人たちのためにその見解を披瀝されたものである。私たちはそこに女性の立場からの痛切な訴えをきくことができよう。
 学問と情熱とのすぐれた結合の書
 私には、高群さんの一連の労作に、学問と情熱とのすぐれた結合を見る。女性の歴史がひろく渉獵され、分析され、きびしく論考されつつ、絶えずその間を縫って、詩想ともいふべきものがうつくしく閃めき、そこからすばらしい真実の見えがうまれ、われわれを開眼させる。日本人がほんとうに人間らしく生きるためにささげられた高群さんの業績に、万人とともに敬意を表したい。
 阿部知二

家永三郎

高群逸枝自伝 解説 瀬戸内晴美

火の国の女の日記

(上) 価380 第二刷

△女性解放に根拠を与えるものとしての女性史学Vを、無から夫婦の同志的結合の中に打ち立てた高群逸枝の自叙伝。1909年、69歳、病床にあり起筆、97年急逝去夫三が補結。彼女の生きよう、全像を最も良く伝え、今や華やかなる女性論も色褪せる。まさに△女性の自叙伝、それが女性史Vであった。上巻は火の国の女の眞性を自覚し、原型をなす37歳までを収録。

火の国の女の日記

(下) 価440 第二刷

1931年、37歳、森の研究所に面会謝絶の札を懸け△女性史学事始V、与えられた道を歩み始める——机上に本居宜長「古事記伝」唯一つ。「最も良き後援者となろう」と誓う夫三と唯二人で。△1日10時間Vの脱書を己れに課し、生涯無名の一坑夫に終ることを望みつつ——。遂に古代系譜に多祖を発見、日本母系制社会を史証し婚姻史、女性史へと結実する。いわば白熱の時代そして終焉、30余年の生を語る。

講談社文庫

高群逸枝

女性の歴史

(上) 価460 第五刷

高群逸枝

女性の歴史

(下) 価500 第四刷

女性史の方法覚書 (5)

女性史にたいしては、あらためて、いくつかの設問が提出されねばならない。わたくしのなかには、いまだ解答にいたらぬ問題の連鎖がある。このなかのいくつかは、考古学上の発見、神話学などによって各種多様な仮説を生んでいるものもある。仮説のなかには、個体のなかにみられる固着した観念からくる偏在としてしか、受け入れることができぬものもある。わたくしは、これから提出するいくつかの設問を、いまだ設問の域にとどめるしかない位置にいる。だが、この位置は、始源の時にたいする仮説が、誤謬をふくんだまま、すでに固定観念になろうとする状態を、設問の場へ引きもどすきっかけにはなるであろう。

仮りにひとつの事例が提出されたとする。この事例を、女性史のなかの具象としてあつかうとき、「学問」といわれるものの領域でまったく別の仮設がたてられる場合もある。ひとつの事例が仮説として本質的な差異を引き起した要因を、露頭観のなかで、高群逸枝はつぎのように展開した。この展開は、仮説性を検討するものにとつて重要な教示を含むものである。

河野信子

——露頭とは、「現場あらはし」の謂であり、いいかえれば現場の「寝床あらはし」の儀である。自族の女性の寝床に忍んで通ってくる(その通いの期間を三日に象徴化する)婿を、その現場の寝床でとらえ、自族の餅、自族の食を、供するのである。婿はいなおうもなくこれを食うが、これを食えば「よもつへぐひ」や「うきゆひ」とおなじで、女家の族の一員となるのであり、その運命は、従来の夫婦別居、通い婿と袂別して、当然香を女家にとどめて住みつき、自己のカマドの火を女家側の火に合わせて女家の族と同火共食することに決定づけられるのである。これが露頭の由来とその本質であり、爾余の追加行事はとりもなおさずこの露頭の意識の敷衍であり、効果の強調であるのにはかならない。女家側を主体者、主謀者とする、女家側による婿取の儀式にはかならない。だから、婿の足がとまるように、その香を女家の父母が三夜連続して抱寝をしたり、婿が持参した火を女家のカマドに永久に混じたり、婿がつれてきた供人をよくねぎらい、牛飼いや車副すなわち供人中で、もつとも側近にある者には、女家の新服を着せたりして、これらを薬籠中のものとするのである。くりかえし

ていえば、これは「婿取」であつて、「嫁入」ではない。「嫁入」というのは、後章でくわしくみるはずであるが、「婿取」とは似て非なるものであり、段階をも、性質をも異にしているものである。「招婿婚の研究」全集版第二巻四五四—四五五頁

柳田国男は、この露頭を、のちの嫁取り婚と並存した「嫁入り」のなかの一儀式として位置づけている。婿取りと異つて、女を選択するのは、男性の側であり、婚姻の主体者はつねに男性であるとき、このため、露頭式の折には、酒食を持参していくのは、婿の側であるとされている。

だが、露頭式の折に、婿側が酒食を持参した例は「一つもない」と「招婿婚の研究」のなかでは、つきとめられている。柳田国男は「嫁入り式」の儀式をもつて招婿婚の婚姻の儀式にもおしかぶせてしまい、この推論から招婿婚の存在を否定するといった結論を導きだしてしまつた。あれほど民俗資料を、「重出立証法」の名のもとに体系化し、「妹の力」のなかで「薩摩のごときはつい近いころまで、婦人を憎みきらうことをもつて、強い武士の特徴としていたこと、西洋のシバルリーとはちようど正反對で、戒律のやかましい聖道の僧などよりも、さらに過ぎたるものがあつた。堂々たる男子がわずかの接近をもつて、すぐにめめしい柔らかなさにかぶれるものと信じはすがない。汚ないとか穢れるとかいう語で言い現わしていたけれど、つまりは女には目に見えぬ精霊の力があつて、砥石をまたぐと砥石が割れ、鈴竿、天秤棒をまたぐとそれが折れるというように、男子の臂力と勇猛とをもつてなしたげたものを、たやすく破壊しうる力あるものごとく、かたく信じていたなごりに他ならぬ」と書いた柳田国男にして、このありさまである。これは、時代の共同観念の位置に固着した女性無視が潜在力として働いたことと、方

法上の欠如の相乗作用とみないわけにはいかない。だから、「目に見えぬ精霊の力」として存在を棚上げしたものは、ときとして、遊行する自己の観念を具象のなかに介入させる力を失う。

—— いったい、柳田氏の招婿婚観（婿が妻家に通つたり、住みついたりする形式の）は第三章第一節母系婚体でもみたくすように、母系時代の妻間婚——すなわち、夫婦が別氏族に属し、氏族生活の建前として各自が自己氏族を離れえず、延いて当座の同居はありうるがけつきよくは別居、通い婿が原則であつた時代の婚姻制を起点とする進化発展とはみず、はじめから父系制的「家」の存在を静止的に想定し、鎌倉以前すなわち武家以前にあつては、件の「家」の息子は、より自由に女と私婚の事情に入りうるが、ようやくそのことが不安視されてくると、嫁入すなわち露頭の式をもつて、婚姻開始日とするようになり、したがつてその儀式なども盛大に執行されることとなる。しかし嫁入は、あくまで「女を乞ひに行く方式」であるから、儀式後若干年の後には、目的どおり女をつれて自家に帰る。しかし、婚姻式は、すでに嫁入——露頭日の式——ですましているのだから、女の引きうつりには、これという式もない。けれども、女の引きうつりこそは、婚姻の目的であり、究極である。——略——（『招婿婚の研究』全集版第二巻四五七頁）

「父系制的家」の存在を静止的に想定するといった固着した観念をもつてすれば、事実はたやすく見落されてしまう。婚姻の日の酒食を用意する側が男家であるか女家であるかは、どうでもよいことではない。儀式がもつ呪縛を、なかに解きかけている現代でさえ、遺存された形式は、合理性の踏みこみえぬ領域を精神の核に残

している。まして、婚姻の式にふくまれた行爲は、人間の集團の關係を、ひとつの構造として示す位相のなかにある。關係が替われば、願われかたの構造も変わる。無視してよい資料などというものがあつて得るはずはない。柳田民俗学は、火の意味や、酒食の意味と民衆の生活が定着させた表現の形態を重視している。にもかかわらず、平安期の露頭式の形にみられる事実は、無視してしまつた。おそらく、これは意識された無視、あるいは、資料の撰択というよりは、村上恒彦によつてつぎのように指摘された、方法上の欠落からくるものであろう。

—— かれらによつて変化とは一定の枠内の現象面の移り変わりであつて、その現象が婚制の上でどのような意味をもち、なぜある方向に変化したのかを知ることができない。（『高群逸枝と柳田国男』『高群逸枝雑誌第十号』）

露頭式ひとつとっても、学問の世界における曲解は、固定観念によつてひきおこされる。発想の根源に、暴力の悪魔を住みつかせ、権力意志で凝りかたまつて亡者だけが曲解をひきおこすのではない。時代の観念が、父権を歴史のなかの形態変化のなかの一形態とは見ずに、人間固有の原理とみるならば、誠意と冷静さを失なわない研究者の目をも曇らせてしまう。

現代でもなお、人類の原初の時の「自然的な家族」にたいしては、「固定したパターン」から、さほど自由ではない。「自然的な家族」といえば、男と女と子どもからなる生活共同体であり、ここで、子によつて、男は父であり、女は母である。だから、「自然的な家族」のなかで、生活共同体の成員は、それぞれの位置と役割りを担つて、意識の場でも強い結合にたつていた。男は女と子どもを守り、女

は子を育て、……といったように、安定し静止した構図なのである。このような構図を描けば、男は強くたくましく、優しいものとして父権なるものは、人間が精神の安定と秩序のために受け入れてきたもののように固着してくる。多くの学問的研究が、人間の始源の時にたいして、さまざまな仮説を提出していてなおである。

わたくしはここで、自然的な家族なるものについて、いくつかの設問をこころみてみたい。

④、始源の時に、自然的な家族は、はたして、男と女と子どもから構成されていたであろうか。女と子どもだけが一単位となつていたのではなからうか。

⑤、仮りに女と子どもが一単位となつていたとすれば、共同体的規制と指導原理をもつたはじめの人間の社会的集團は（動物的群居を離れた）は、女によつて形をととのえられたのではなからうか。

⑥、このとき、男たちは、女と子どもとは、別の集團をつくりながら、放浪を開始し、いくつかの女と子どもとの共同性を侵略したり、住みついたり、することも考えられないわけではない。

⑦、女と子どもとの共同体ならば、放浪を開始する位置にある男たちは、外敵から女と子どもを守るよりは、女たちの集團によつて、敵としてたちあらわれ、女と子どもは、自力でおのれの集團を守らねばならなかつたのではなからうか。

⑧、このとき女たちは、武力をみずからのものにするとどまらず、精神界を支配する呪術や宗教を編みだし、外部集團、または巫集團としての男たちの集團を屈服したのではあるまいか。

このようにして、設問をつづけていけば、きりもなく提出できるものである。ながいあいだ、公理の位置を占めようとしてつづけた、男と女と子どもからなる「自然的な家族」を、思弁のなかで否定してみただけで、このありさまである。

設問が、設問であるにとどまらず、欠落してしまっている人類の記憶として、掘りだされ、仮説となってしまうならば、人類最初の差別者は女だということになってしまふ。女は、女と子どもとの共同体を防御するために、知力によって得たものを、共同体的規制として定着させ、男たちを被差別者の集団におとしめてしまったわけである。差別者が被差別者にむかう方法は、被差別者のなから、部分的な能力を必要に応じてつまみあげる道筋と、集団ごと奴隷に近い労役のなかに置く道筋がある。差別者は被差別者を共同体の精神的な全統御の中核にもつてきほしない。被差別者が、能力をつまみあげられ選ばれることに、同意または妥協するならば、個体の部分的な能力を、すべての精神力を集中して磨きあげる。世代を重ねるにしたがつて、被差別集団内部の個体の力は、初期とはくらべものにならぬほど強力なものに転成していく。差別者が差別の温湯のなかで、怠惰と栄華にあぐらをかき、停滞のなかにいるならば、被差別のなかで、転成させたおのれの実力を集約して、差別者にたちむかう。このとき、被差別者にとつて、自己の解き放ちの行程は、差別者の全統御と、力による支配をみずからのもとするしかない。差別者にたいする許容などというものはありえず、完全な奴隷として出口をなくすしかない。だから、仮りに、古代の女性中心の政治が、女たちの過剰防御からくる差別の定着だとするならば、現代までつづいている女性の被差別状態は、御先祖さまの因果のめぐりきたものだということになる。

歴史時間(単純な時間・地球的時空で連続している時間ではなく、社会の組織形態をよくめた時間)をさかのぼればのぼるほど、女神が圧倒的な比重を増すのは何故であろうか。この内実には女性支配の固い累積とするならば、この仮説は、現代の女にとつて喜べることはない。まして、この支配のなかに、女たちの過剰防御からくる

差別の構図をおもひ描くなら、なおのことである。

女神の圧倒的な比重を、精神的昂揚をもたらす異性幻想と、とるか、産みだすものへのむけられる神秘性への尊崇とするならば、まだ救われる余地はある。異性幻想とれば、現代の「女性陛下のために!!」と氣勢をあげる行動に似てくる。異性の神、または中性の神は崇めやすいが、同性の神は、倒錯者の心境に近づく。行政的、実務的な場をいっぽうの性が占めた場合、象徴的な人物の性は、行政の場を占める人物とは逆にしておいたほうが、争いはすくなくないとする原理にもよる。これは、女王または女酋の存在にたいして、しばしばたてられる仮説でもある。まつりあげられたひとりの女性は、象徴的存在にすぎなくて、政治にたいする発言権はなく、政治的な力はことごとく男性の手にあつたとする立場である。命をかけて出でたつ男たちには、魂のよりいっそうの昂揚を、家内奴隷に近くおとしめられた女たちには、女の王の存在による代償をというわけである。

産みだすものなかにある神秘性への尊崇とする立場は、男女双方に受け入れられやすく、伝承された多産豊穡への祭りの儀式にも結びつけられる。女は、産みだす力を内在させた超越性をもつものとして、生産の根源的な力に同致され、クーバードの風習を伝播させた。

クーバードとは(擬産)と訳され、男によってなされる出産の擬態である。夫は妻の出産に相前後して床に就きあたかも産婦のように擬似的な産褥熱を思ふ。この風習は母系制に対する(父)の権利の主張と(子)の(父)への帰属に対する要求として行われたという。(橋本真理「母の思想」)

女神の圧倒的な比重を女の過剰防御からくる差別の構図の定着ととる立場も、異性幻想ととる立場も、産みだす力への尊崇ととる立場も、いずれかひとつに偏在し、人類全体をひとつの仮説のもとにつつまこんでしまふならば、人間の精神の核を大きくそぎ落し、精神的作用を、狭い領域のなかに閉ざしてしまふ感を生ずることになる。現代の人間は、個体を、まして自己を、類別されたり標本のようにピンでとめられたりすることを好まない。にもかかわらず、人間の祖型のこととなると、原始的形態といった名のもとに、現われる様式をも偏在させたがる。それも、初期的な抽象性によってではなく、枝わかれしてしまつた文化のひとつの型によって単純化をおこなうとする。

女による差別の構造の定着も、異性幻想による女王の抽出も、産みだすものへの尊崇も、いずれも、歴史時間のなかで、特定の地域では、一時期実在したことがある。だが、これは祖型ではなく、枝わかれしてしまつたのちの現象である。いずれの現象も安定した相を描きうるわけはなく、たえざる動揺にさらされてしかるべき質をもっている。

女の集団によって定着させた差別の構図のなかに、個別的に異性をよぶ人間の情熱が、生活の場に相手になる性を誘い入れ、離れ

瀬戸内晴美 日月ふたり

■文芸展覧

第2号 連載(価各五八〇円送各一〇〇円) — 奨めたい文獻。
第3号 第5号 第7号 — (価各六八〇円送右同)

平凡社六十年史

(七、〇〇〇円)

東京都千代田区四番町四番地

平凡社

がたい思いをつのらせるといった混乱要因があることを忘れてはならない。ここで性的差別を定着させれば、差別者の側にも寂寥があり、渴きがある。被差別者によってひきおこされた革命に呼応して、差別者のなかからも、被差別者に加担するものたちがでる。差別の構造をつきくずすために、自己集団からの出離は、あとをたない。異性幻想によって王という名の供儀の素材とする見解には、高群逸枝の「女性の歴史」の第一章、第二章によって完全ともいえる反論が展開されている。支配の位置にいた女性は、それぞれの族母達から抽出された存在であつて、実態なき象徴ではなかつた。生みだすものへの尊崇もまた、肯定的現象を定着させるとはかぎらない。火を噴き、激流を出現させ、地を灼きつくすといった地上で生活している人間の心性に、生産にたいする罪責の意識が根をおろすことはありうることである。アステカの祭儀のなかに展開される血なまぐさが、トウモロコシの収穫祭であつたことを想起すれば、尊崇は、たやすく血の供儀に変わるものでもある。未来を解放にむけて問うならば、祖型にむけての設問は、愚問であるか賢問であるかの検討に足をとられたり、ためらつたりすることなく提出されつづけねばならない。賢問とは、ときとして、閉ざされた仮説の領域内で発せられる偏執の一種であつてみれば、設問に賢愚の序列づけは避けたいものである。(以下次号)

東京都千代田区
神田小川町二一八

筑摩書房

高群逸枝論 (10)

「胎児の意志」と「母性の意志」 2

石川 純子

まだ八月始めだというのに、水俣の八百屋のたたきにつままれたはずききは、真赤に色づき、陽に焼られて燃えているようであった。

「毎朝お日さまは、東から出て西へお沈みなさるが、そのお日さまは夜になると、地の下を潜ってこのホウズキの中へ、一ツツお入りになる。それでこんなに色が紅くなるのだ。ホウズキはお日さまの赤ん坊だ。」「聴耳草紙」より。(岩手県金ケ崎町地方の語)
私はこのような昔話を語るところから出かけた旅人だから、まだ真緑のまま野辺に群がり立つ、みちのくのほうずきを思い、それに比して盛夏一時に成熟させてしまう南国のお日さまの強烈さに、今更ながら驚嘆させられる思いであった。そしてそれは、その前日の夕べ、松橋(逸枝誕生の地)で見た、空半分朱に染めていつまでも暮れない夕焼けとともに、「火の国」なることばを、ことばとしてではなく、実感として、私に理解させるに充分であった。思えば「火の国の女」とは、陽に焼られ、陽の熱気を一時に吸って、盛夏に成熟してしまうこのほうずきたちのようなものではないのか。私はふと、覚えていた逸枝の次のような短歌ともひき比べながら、逸枝が「火の国の女」の資質としてあげた、「火のように強い情熱と夢」

今日はやっぱりあの続きを聞かなくてはと思うのであった。

その前々日、「胎児の意志」と「母性の意志」などというテーマをさまよい続ける私は、なにかしらそれらを明かにする手がかりを求めて、橋本先生の前に坐っていた。初めてお会いして、緊張のあまりに満足に質問もできないでいる私に、橋本先生は心をほぐそうとされ、ほとんど問わず語りのような形で、「逸枝先生」の思い出を語ってくれていた。そして遂に、

何か、あなたの方から聞いてくれれば、僕はらくだなあ。何でも答えます。
そう言われて、やっと私は、

あの……やっぱり私、今書いているところのことお聞きしたいのですが……。
と、おずおずきりだしたのであった。
あの……死産してますね。あの、生まれてくる時、死んだのですね。

「火の国」のとおりですよ。
「火の国」……
医師がそう言ったんですよ。産婆の手落ちだと……。じつは僕が殺したようなものですよ。

こう言われてから、橋本先生は口から出してしまったことばに少しためらっておられるようであった。が、それから表情をゆがめて早口に、そして幾分声高に、

産婆が押してくれというんです。手伝ってくれと。だから、僕は言われる通り、押したんです。
今のように分産室などというところに隔離したわけではない。産室は産婆家の座敷の、おそらくは奥まった一室でもあったろう。そこで陣痛に病む妻。そのかたわらに居ても立ってもおられず、勝手場におりたり、庭をうろろする夫。△注1▽

(9巻P145)を本当に理解できる思いでいた。
くろ髪を

首に巻き首に巻き
ころろ燃られ落日す (8巻P339)

ところが、嘗々と淡い陽を孕み続けて、秋の半ばまで、霜にせかされてやっと色づく、わたしの岩手のほうずきたち。「火の国の女」を南国のほうずきに例えるならば、私もまたこのほうずきたちのようなものだろう。であれば、私はなんと大変な女人にかかわりあうてしまったのかと、あらためておのれの対極に、しかも仰ぎみるような高さにいる逸枝を、半ば悔いるような気持で思うのであった。
その彼をあげた時、私の手の中でほうずきは、真赤に、みずみずしく熟れていた。それは、「お日さまの赤ん坊」というより、私には、おっぱいのように、「火の国」のおっぱいのように思えた。乳房の突端にまあるくぼろんと坐す乳首。そのほうずきの実は、子に乳をやるために乳房をつまむと、ひよいと上向きになる時の乳首のかっこうとよく似ていたのである。あの乳のしずくをためて、慈愛あふれる目のようにぼつとりふくらんだ乳首に。

「火の国」のおっぱい……逸枝のおっぱい……そう思うと、なにかしらやさしいものがわきあがってくるような、かきあつめねばならぬ情性が身内にただよっているような気持にさえなつて、私は、

「彼女はバケツに水は半分しか持てなかつたなあ」と、橋本先生がくりかえして語られたような妻であればなおのこと、病む身よりも正気の夫の方がもつとせつない。そのとき手伝つてと言われたら……どんなに精根こめて……私は思わず聞いていた。

やりかたも知らないで、力一杯？
えー、わけもわからず、力一杯。

そもそも死産のことを語つてもらうなどということ自体が酷なことなのに、私はそのときになって初めて、このようなことを思い出させてしまった自分の無神経におろおろしてしまっていた。それ故、その話は、そこでやめ、別の話題にそれてしまっていたのである。
が、今日は、やっぱり続きを聞かねばならない。あれがあるから……ほうずきを見た時のやさしい気配もあそこからやつてきたのかもしれない……あの「愛らしく足をつつばつて」ということばから……と、私は、その前夜、松橋の旅館で読んだ「今昔の歌」の一節を思っていた。それは、松橋を基点に、逸枝ゆかりの地を案内してくれた相藤利男さんが、「ゆうべ、これを読みなおしてみました」と言つて持つて来てくれた本であった。「今昔の歌」とは、逸枝が六十五歳の時、熊本日日新聞に百回にわたつて連載したもので、小さな自伝風の著書であるが、「火の国の女の日記」と重複するところが多いためか、全集に入っていない、私には初めて見るものであった。△注2▽

逸枝はその本の中で、臨月近いのを押して、あえて上京する自分の姿を、次のように記していたのである。

「事実私は臨月に近い状態で、熊本から汽車にのつた。その汽車がまた非常にごんでいたので、胎児の頭が人によつからないように必死になって防衛したことを忘れることができない。すると胎児は愛らしく足をつつばつて、私を安心させたものだった。」(P220)

この「愛らしく足をつつばつて」ということばに出会った時、私

は何かしらひっかかりを感じて、しばらくの間その先を眺み進めることができないでいた。私と逸枝とが体感を通して、一瞬ひきあつたような不思議な情感にとらえられたのである。「愛らしく足をつつばって」ということばが、あの私自身の孕みの情性を、私の中によみがえらせてくれたのは言うまでもない。妊娠後期の、あの胎児の激しい動き。その毎にわきあがる困感といとおしみ。おかしきもいとおしくも自分もまた胎内に子を孕むほにゅう類の一員であるという発見などの……が、それだけではない。いや、そのとき私はこれらの「人情性」を私自身のものというより、逸枝が実際に体験した逸枝自身の孕みの情性として感じていたように思う。つまり私は「愛らしく足をつつばって」ということばによつて、初めて逸枝の孕みの情性へふれることができたらしいのである。おかしきことを書くと思われそうだから、ことをわけて言えば、前回書いたように私は、自分の孕みの情性から、逸枝の孕み、出産へアプローチしようとした。それはそれでいい。が、それにはまず、逸枝の孕みの情性に出会わねばならなかったのである。ところが、私はその最初から「胎児の意志」という目もくらむようなことばにめんくらつてしまひ、それが立ちふさがる形になつて、逸枝の孕みの情性に触れないでしまつていたのである。だから、前回書いたように、「胎児の意志」なることばを解くべく、逸枝の「孕みの情性」をたどることができずに、勝手に自分の孕みの情性から、それを類推するなどという愚をおかしてしまつたのである。また、前回、「孕みの内界」を解くようなものは、全集を讀んだ限りでは何もなかったと、書いてしまつたのもそのためである。

ちなみに、今あげた上京について、「火の国」には次のように書いてある。

「車中はたいへんな混みようで、私はしばらく、立ちながら、胎児の頭の人かぶつからないように必死になつて防衛した」(P195)とまずあり、次の章に入つて、「胎児は弥次でも難波をきわめた東

上の車中でも元氣よく動いて、私の不安と動揺をなぐさめてくれるようだった。」(P196)とわけてある。

確かに、「火の国」の「元氣よく動いて」よりは、「今昔の歌」の中の「愛らしく足をつつばって」の方が、ずっと孕みのリアリティーを表現してはいる。だが今、こうして引用部分全部を比べてみれば、これら二つの表現にどれ程の違いがあるかと思ふ。だから、「火の国」の方ではなく、「愛らしく足をつつばって」ということばによつて、逸枝の孕みの情性によりやく触れることができたということも、私の感性が、このわずかに、孕みのリアリティーを表現していることばの方に、反応したというよりは、その前々日、橋本先生にうかがつた死産の話を通して、生身の逸枝に、いくらかでも出会つていたからだと思つた方が正しいだろう。ともあれ、私は、「愛らしく足をつつばって」ということばを媒介にして、逸枝の孕みの情性に出会うことができたのである。

逸枝の孕みの情性と、私のそれとの出会い。形而上界から発せられた「胎児の意志」以前の、生身の逸枝の情性との出会い。その出会いの衝撃のようなものが、「今昔の歌」を手にした私をしばらくとらえていたのであつたらう。

橋本先生にいたましい思いをさせながら、それでもやつぱりあの続きを聞きたい、いや聞かねばならぬと思つたのは、このためだったのである。

続きを聞くとき、私は最初の日のように、そんなにおずおずしてはいなかった。それに、橋本先生のやさしさも、もう充分わかつていた。

あの、おつばいは。あの、赤子が亡くなつても出るのですが……わたしは、こんなことまでたずねていた。

あの、それで、赤子が亡くなつたあと、逸枝先生が、それで苦しんでいたとか、しぼつていたとかいふ記憶は？

あ、おつばいは。あの、赤子が亡くなつても出るのですが……わたしは、こんなことまでたずねていた。

あ、それで、赤子が亡くなつたあと、逸枝先生が、それで苦しんでいたとか、しぼつていたとかいふ記憶は？

あ、おつばいは。あの、赤子が亡くなつても出るのですが……わたしは、こんなことまでたずねていた。

あ、それで、赤子が亡くなつたあと、逸枝先生が、それで苦しんでいたとか、しぼつていたとかいふ記憶は？

さあ、どうだつたかな。そんな記憶はまるでないな。どうだつたかな。覚えていないなあ。なにしろ、前に言つたように、はばかりに行くのなども何十年と僕に気づかせなかつた人だから……そんなことあつたかなあ。いや、あつたのかもしれない。おそろく。だが、僕の記憶にはないな。

あの飲む子が死んでしまつたのに、乳は出る。出ればしほらなければならぬ……その時逸枝先生は何を考へていたのだろうか。つて、このごろ思つて……あの、気が狂うようなところで、何かこう感知したものがあつたんじゃないかと思つて……

ええ。そりやあるでしょうね。
あなたは異常ですよ。△注3▽

私は次に問おうとしていたことばをあやうく飲み込み、その「異常」なることばを肯定するようなあいまいな返事をした。橋本先生は勿論、とがめだてするようない方で、そう言われたのではなかつたが、私は、消え入りたような恥ずかしさをどうすることもできなかつた。

「彼女には、四分の三ぐらいの武士の血が流れていました。決して馴れなかつた。いつもへだたりを置いていてね、夫婦のあいだでも……。僕の方がね、ちよつと彼女の肩に手をかけたりすると、にっこり笑つて、

「親しきなかにも礼儀ありますよ」とか言つてね、そつとはなしましたよ。」

最初の日の、橋本先生の問はず語りの思い出の話の中には、このような「逸枝先生」の話もあつた。それを語られる時……きつと先生は、森の家の当時にひきもどされるのだろう。「僕の方がね、ちよつと彼女の肩に手をかけたりすると……」先生はまるで、私たちにその現場を見つけれでもしたように、恥ずかしそうな表情をかくさなかつた。先生は、七十七歳と語られていたが、年齢も感性

も、あの森の家で二人で暮らしていた時のまま、老いることがなかつたのである。そんな先生に、死産のことや、おつばいのことなどまで、もちだすとは、私は再び自分の無神経さに悔いる他なかつた。

しかし、一方で私は、「異常」だと指摘されたことに、満足しているような気持を幾分持つていた。なにしろ、今自分は「孕みの情性」を孕んでいるのだから、という思いで心が、たかぶつていたから。だからその時私は、今の自分は、その「異常」に居直る他はないのだと思つたのである。

船途、福岡から乗つた飛行機には、坐席についたまるいものをくるくるといじくると、様々な音楽や落語まで飛び出すサービスがいたりして、たいくつも恐怖も感じさせないしかげになつていたが、私は鋼鉄でできた魚の胎内にでも閉じこめられたよう息苦しくてならなかつた。飛んでいるのか、浮いているのか、とにかくあらゆるものから隔離された巨大な胎内の五百人もの中にちよこんと坐つていると、その現場が魚も鳥も森も海も土もみんなコンクリートでぬり固めて、人間自らを閉じ込めつたある文明を象徴しているようにも思えてきたりした。それでも私は大人だから、それに自ら選んで乗つたのだし、一時間半もすれば脱出できることも知つていたから、拒絶反応を表に出したりはしない。が、その空間への拒絶反応は、六ヶ月位の赤子の泣き声から上つた。赤子は本能的に、自分がつれこまれた空間の反自然を感じとつたのかもしれない。若い父親と母親とが、二人がかりであやしても、ミルクをやつても、身をそりかえて泣くばかりで、思いあまつた母親が、赤子のからだをゆすりながら通路を行つたり来たりしても泣きやまなかつた。その赤子の泣き声は、閉じこめられた人間たちひとりごとりが黙した一室の中で、なんと生々しく響いたことか。私は泣き続ける赤子をあやしきれずに、困まりきつた母親の姿を見ながら、おつばいをあげればいいのに……「いい子ね。こわいものは何もないよ」と、プラ

スチックのほにゅうびんでもなく、サングラスごしの母の目でもなく、その麻のワンピースのざらざらした胸でもなく、あの乳房が垂れる、はっきりとぬくい自分の胸で、赤子の目も口も頬も頭も、お尻も、手も足も全部おあってやればいいのに……と思っていた。いや、そんな思いよりもっと早く、赤子の泣き声が私の乳房に響いてしまったのかも知れない。一年四ヶ月になる下の子の、乳離れがすんだから九州まで出かけられたのだし、六日間の旅行中もそんなことはなかったのに、私の乳房は、休火山がよみがえったとでもいうように、胸の奥底から始動しはじめたのである。私は乳房をはるにまかせながら、やっばり「異常」なのだ、あの橋本先生が言われた「異常」なることをかみしめていた。その時、赤子の泣き声と、私のほりつづけるおっぱいと、一緒に九州に行ってくれた小原麗子さんが、道中ずつとかかえてこられた「火の国」のほろずき、これだけが、鋼鉄の魚の胎内にまどろむ人々から遊離して、私の「異常」なる「孕みの情性」の中でわきたっていた。

2

このような旅を終えて来た今、私は、△孕みの内界▽を解く手がかかりは、全集の中にはなかったという前回の稿を訂正することから書き始めねばならない。今となってみれば、「火の国」の中にも、「東京は熱病にかかっている」の中にも、「日本の婦人の愛のころ」などというエッセイの中にもその手がかりはあったことがわかる。くりかえしになるが、それがわからなかったのは、逸枝の孕みを考えた時に、そのはじめから、「胎児の意志」なることばに眩惑されてしまったためだといつてよい。

それで私は、前回のやりなおしになるが、これからは、逸枝が書いていたことをこまかく追うことで、△孕みの内界▽へ迫ることをこころみねばならないと思う。

例えば、「火の国」で次のように書いているところからまず孕み

の情性をたどってみよう。

「軽部家についてからは、私は胎児のために運動を怠らなかつた。軽部家は、部落はずれにあつて、「南」と呼ばれており、南も東も西も畑と森ばかりであるが、それがほとんど、軽部家の所有地なので、誰にもじやまされないので気がラクだった。森のはずれには小さな谷があつて、草の間を水の子たちが飛びはねてでもいるようなぐあい、水玉を劔ね上げながら、ちよろちよろとぐり抜けていた。いま私の研究室のあるところは、そのころ軽部家の新炭林で、小鳥らのよいすみかだったが、この中に入り込んで時を過ごしたことも多かつた。」(P 196)

この逸枝の情性は、「今昔の歌」の次の一節とあわせ眺めれば、あのいにより添う孕みの情性を完璧に語りえているともいえる。「世田谷にいつてからは、いつも麦畑の道を歩いたり、林のふちにすわたりして、胎児とふたりで春光のなかにいるのが愉しかった。」(今昔の歌 P 220)

森、小ながれ、飛びはねる「水の子」たち、小鳥たちのさえずり、やわらかな春の陽さし、その中に「胎児とふたり」で坐っていた逸枝。この絵のような光景、そしてここに流れる情性は私には、一般的な意味でも孕みの一つの原因とさえ思える。あえて長い引用をしたのは、この「春光」の森に胎児とふたりであつた情性が、逸枝のこの後の原点になつていと思うからである。

ところでこれからが肝心のだが、「火の国」の今引用した文のすぐ後の、死産の原因を語るところに、次のことばがある。

「胎児を遇する環境の不安定などのために、産婦が神経過敏におちいつていたりしたのが原因だろうということにして、助産婦のいい分を支持した。」(P 196)

これは読みかたをかえれば、死産の原因と考えられる程、それはど妊娠中、逸枝が、「神経過敏におちいつていた」という事実を語るころでもある。前回私はここをすつかり見落していた。逸枝の

出産は、弥次海岸へ都落ち、そこでの妊娠、それを気づくやあわてて上京の決意、それも、生活のあてがあつたのわけではなく、とにかく一年前まで寄寓していた軽部家へ……というようなかつこうだったので、私は、「胎児を遇する環境の不安定」なることばを、単純に、生活の見通しもたないところでの出産だからという程度にしか考えていなかったのである。が、それは確かに、直接的には、そのことから発したのであろうが、逸枝の目は、自分たちの生活の不安定、したがって「胎児を遇する環境が不安定」という個人的な時点にとどまっていはいない。そのあかしが、前回も引用した、

「一略一産児は社会全体によって守らねばならず、これを阻害する条件はすべて排除されねばならないという強い意欲を、私は胎児

の意志をとおして感じた。数十年來、産児は、各自の家々の私的保障にゆだねられてきたが、そうすると、各自の家々の貧富の差別によつて歪められねばならない。これは胎児の意志ではなく、したがつて母性の意志でもない。一略一」(P 196)である。つまり、「神経過敏」におちいりながら、逸枝はここまで見ていたということである。

ところで、「胎児とふたり、春光のなかにいるのが愉しかった」逸枝と、また一方で、「神経過敏におちいつていた」逸枝とは、どのようにつながるのか。私はここに「孕みの内界」を解く鍵が秘められていような気がする。(つづく)

△注1、最初から彼女につききりであつた。それは彼女の前のたのみだった。――編集室K▽

△注2、重複しない部分は第9巻に収められている。――同▽

△注3、私はいまこのことばがわからない。たぶん男性にはわからないことをきかれたのでとまどい、しかしそれが石川氏にとつて重要な課題につながっているであろうことを直感し、氏の独特の感性ないし思惟について心からの敬意を表したのではなかつたかと思う。――同▽

恋愛論

異性を呼ぶ精神の核・河野信子・450円【三書房】

――奨めたい
文獻

東京都千代田区
神田駿河台2-1-9

三一書房

河野信子 女の論理

1 △柳下村塾新書 価四〇〇円 郵送料八五円 柳川市一新町一五

柳下村塾出版

女の論理序説

族母的解放の始源 980円 東京都板橋区大谷北町四一

永井出版企画

火種はみずからの胸底に

山崎朋子

エッセイ集

980円

筑摩書房

母系制の研究との出会い (三)

寺田操

歴史が生存する人間の生命活動であり、自然存在としての人間歴史であるかぎり、男と女の関係は、自然的な、そして社会的な関係としてあらわれる。換言すれば、男と女の関係、性とさまざまな婚姻の形態は人類史の根幹である。

父系観念から系譜を古代にまで遡行させる解釈と固定した見方は、歴史を抽象化させてしまうことで原型を見失わせる。それは婚姻においても同様の現象をあらわし、現在の状況下でもなお家長的呪縛の根強さから男も女も全的に解放されてはいない。

高群逸枝によって系譜的に実証された母系性の存在は、同時に純母系→父系母族→父系母所と緩慢に系譜面で浸蝕していく父系観念を視る。さらに古代系譜を成立させることによって系譜観念を制度として、権力構造の高みへ、家長的呪縛に一对の男と女をとらえる構造を創ぐ。

婚姻面ではそれらが具体的に、実際のにどのような形態を持ち、どのような発展経過をとりながら一方の性の他方の性の従属、支配の関係をうみだしていったのか。

ある日私は、採集した婚姻語のカードをみて、ツマドヒ、ムコトリという婚姻語が日本古代の婚姻語の代表語であることを知り、この婚姻語の推移が、すなわち大まかには婚姻形態の推移をものがたっている一つまり、この二語がそのまま古代婚姻史の時代区分を反映しているということを知った。そこで必然的にヨメトリ

という婚姻語の追求がこれにつづくことになる。

全集版十巻二九頁

一氏多祖現象の発見が天啓でありえたように、招婿婚研究の鍵はツマドヒ、ムコトリという日本古代の婚姻語に潜んでいる。つまり婚姻語の推移が婚姻形態の推移を示しているとの推測である。ツマドヒの語が奈良頃までムコトリの語が平安中期頃から物語、記録に顕現している事実は、この婚姻語が古代婚姻史の時代区分を反映しており、さらに必然的に追求されるヨメトリの語の位置は、ヨメトリのみが絶対的婚制であるとされてきた神話を崩壊に導くことになる。

招婿婚は太古から鎌倉末期—あるいは南北朝期におよぶわが日本に行われた婚姻の形態である。もともと、われわれは、その初発の時期および事情については、推測以外にこれを断ずることはできない。しかし、わが国の神話伝説から古典、つづいて平安以降の諸家記録等において、この婚姻形態はほとんど完全にちかく把握しえられる。したがって、その間の経過および終焉—娶嫁婚との交替の事情等の観察は、さかのぼってこれの発現についてのある程度の推定をも可能にする。

わが国における招婿婚は、けっして単なる遺制あるいは遺俗などではなく、発現・経過・終焉の段階をもった歴史的存在である。

それは前述の期間における絶対的支配的婚姻形態であって、これと併存する他の諸形態をみることはできない。

全集版二巻三頁

婚姻語の推移が婚姻形態を示しているとの推測から尋かれ招婿婚が発現・経過・終焉の段階を持った歴史的存在であるとの断定は、招婿婚の史的位を詳婚→招婿婚→娶嫁婚とする。それは、婚姻の祖型を詳に置くことによって、父系と娶嫁婚ではじまるとされてきた家族制度固有説の誤謬と通念をくつがえすのに充分な言及であり、歴史の固定した見方の陥穽を創いでいくことにもなる。

婚姻における同居体、親族体系は、カマドを単位とした同火共食の族、そして系観念の現実的な姿である。母系観念といつても後に芽生える父系・父権制下の系譜意識、つまり階級分化を制度化させることで一对の男女を所有の関係を置くものではない。

母系の同居体は、何よりも生命を育むこと、生命愛そのものを最初に内包しており、それがゆえに原始の母性我は、女の生理を尊重した社会組織を詳における自然的本能的段階から共同社会における共同保障の制度へと実現していったのであろう。つまり八愛の本能化 全集版四巻一〇〇七頁Vの表現である。そこには、生活様式の変化と血縁的自覚の芽生えが婚姻面における禁止の意識を共同規模として男と女に観念させる。

血縁的自覚は八母子から同母兄弟へ、同母族へ 全集版二巻五六頁Vと範圍を拡げている。つまり祭婚圏と通婚圏の範圍の変化、設定であり、同一母祖を中心にした族、母系氏族の出現である。同一母祖、母を基本とした子の関係である八兄弟V八姉妹Vを同火共食

の族とすることは、族的共同体による族員の保障を意味し、同居体血縁の禁婚を原理とした同火禁忌(父系異居、カマド禁忌)の俗である。

群婚期を祖型に忍び妻問→現れ妻問→前婚→純婚→経営所婚→擬制婚→娶嫁婚と、この婚制の移行は同居体の変化であり族制の変化を示すものである。

同居体の変化過程は、単に遺族、遺制としてとらえられるものではない。一方では八女は家を離れないもの 全集版二巻一六頁Vもしくは八女は常時自分の家または擬制された自分の家を負っているもの 同頁Vの観念に基づいて規範された俗が、実際の生活面に顕現することによって招婿婚の本質、形態、機能を明確にすることであり、他方では母系原理の基本である父系異居、カマド禁忌が父系の浸蝕により形態を変えながらも原則的にはツマドヒ、ムコトリの全招婿婚期に貫徹され父母両系現象をおこしていることを知ることが可能である。それは系譜面で母系を浸蝕、克服していく父系観念が、実際の婚姻の生活面に入りこむことによって氏族主義から家族主義へと家長的革命をひきおこす過程である。

群婚から個別婚への移行は、群の拘束から一对の男と女の関係の個別的性愛へと進歩する。それは愛を関係の本質としているがゆえに自然婚の表現であり、最も人間の本质として自覚される。しかし、個別的であるがゆえに私有性の発達に比例しつつ漸次、特定の父母の認識、共同体的生活から個別的な生活組織、個人支配としての婚姻へと変質し、階級分化に一段の拍車をかけながら一对の男女を家族の単位としてとらえる母胎となるのである。

私のなかの高群逸枝

8

村上信彦

昭和三八年のメーデーに高群さんを訪れたあと、『日本婚姻史』が刊行された。例によって寄贈を受けたので、私はすぐ書評をかい「週刊女性」にのせた。「週刊女性」と聞いて場ちがいの感を抱く人はさだめし多いと思うが、じつはそのころ編集の実権を握っていたTという男がミハー族の迎合策をやめて新しい大衆女性誌をつくり出そうという野心(?)に燃え、私に毎週の書評を依頼してきたので、私は硬派の書物を意識的にとりあげていたのである。だからTが辞職するまでの一時期、この週刊誌はすこぶる異色を発揮していた。こうした特殊な事情があったから『日本婚姻史』の紹介もおこなったので、かならずしも場ちがいではなかった。

越えて六月、高群さんから熊本の新聞の切抜を送ってきた。地元の高校の図書館でその年の読書率の一位から五位までを発表したもので、第一位が『音高く流れぬ』になっていた。二位が漱石の『三四郎』、三位が藤村の『破戒』だった。これは信州の小諸図書館でも同様で、『音高く...』が第一位になっていることを友人の図書館長が知らせてくれた。ひろくよまれていることと文学的価値とが別であることは私も承知しているからどうということもないのであるが、自分のことのようによるこんでくれる彼女の気持はうれしく、

実現しないままに月日がたった。昭和三九年元旦の年賀状は次のようなものであった。

近況 私は昨春小著『日本婚姻史』(至文堂) 脱稿後病床ぐらしでまだ研究にかえられません。

今年は古稀にあたりますから自叙伝(火の國の女の日記)を書き上げたいと思っています。

面会辞退。

右は印刷で、「自叙伝を書きはじめました」と書き込んであった。次は一月十五日付のハガキで、これが彼女の最後のたよりとなった。

おたよりありがとうございます。らいてうさんにおあいになりましたよし、何彼とよいご収穫をといのります。らいてうさんからもお知らせがありました。

私はまだ離床できずここ数カ月たれにも会えませんでした。竹内博士がいちどふいに診察にお出でくださっておどろいたことでした。

火の日記は60枚ちかく書きすすみました。ご注意ありがたく、ご期待にそいたいと思っています。長友浜田糸衛さんの「野に帰ったバラ」早くからお目にかけたいと思っていました。ただいま小包でお届けします。ご高らん下さい。ご健康のこと案じられますがくれぐれもお大事にねがいあげます。

そしてその年の五月二十日、入院したハガキを受けとった。代理としてあったが、そのときはこれまでの高群逸枝でなく、橋本イツエとなっていた。

私は感謝した。

その後の一年は私にとって最も慌だしい時期だった。関西のバス車掌が売上金を着服したというあらぬ疑いをかけられて、「お母さん、信じて下さい」の遺書を残して自殺した事件がきっかけとなり、全国の車掌が抗議に立ち上る運動が起った。そこで私はまた労働組合をかけることになって多忙な生活がつづいた。そのころテレビに「判決」という裁判をテーマにした良心的な番組があったが、それがこの車掌問題をとりあげようということになり、私は相談を受けた。だがこの番組はすでにブラック・リストにのっていて、自民党から横槍が入って放送中止になった節料をもっていた。車掌の自殺事件のドラマ化がわかればバス会社からの抗議や弾圧は目に見えており、へたをすれば陽の目を見ないことになるかもしれない。そこで秘密裡に準備し、製作をすすめ、抜打的に放送した。やがて「判決」は圧力に抗しきれなくなってテレビから姿を消すのであるが、当時はこんな思い切ったこともできた。一事が万事で、私はほとんど自分の時間を持たないほど、さまざまのことで忙殺されていた。

したがって、再度高群さんを訪れようという気持はありながら、

これから私は高群逸枝の死について語るのであるが、率直に言って筆が鈍る。できれば書かずにはすませたい。なぜならばここにはまず私の誤解があり、多くの人たちの誤解もあり、いまでは私と橋本氏だけの知っている事実もあり、その他さまざまの臆測や見解の相違があって、しかもそれには現在生きている人たちが関係しているからである。ではなぜそのようなことが起ったかといえ、これまで森の家で夫妻ふたりきりの世界に生きていた高群さんが、死をめぐって公共の世界に引き出されたからである。あえて言うならば、絶対的な夫婦愛の世界、なんびとも足を踏み入れることをゆるさぬ世界と、「橋本さんだけの高群逸枝ではない」とする世界との対立である。

それについて私が徹底的に論ずる機会には別にあるだろう。ここではただ、私のなかの高群逸枝に則して、自己中心に当時の模様を語ってこの稿を了えたい。死に触れないですますことはできないからである。橋本氏も私の気持を理解し、許してくれるものと信じている。

私が入院を知って面会にゆかなかったのは面会謝絶を告げられていたからである。次は五月二七日付の橋本氏のハガキである。

つぎの室にうつりました(略)。「面会謝絶主治医」の札は私からねがったものですが、それもあるいは主治医のほうの必要からかも知れず、そのところは不明ですが、とにかく厳守中です。お友だちのおたよりをよんでやれるのが唯一のなぐさめです。

遠方のかたたちにはそろそろおたよりしてもよいと申したりしています。

病院食のほかに、くだもの汁、アイスクリーム、うどん、イメンの類は当人の心まかせにゆるされていきます。付添さん（水江房江さん）がベテランの上、当人がめずらしく気がねしないようなよい人で助かっています。私も三―五時の時間だけで義務をまもっています。

その後の六月二日のたよりも面会謝絶とあった。私はこれまでの森の家の面会謝絶も研究時間の損害だけでなく高群さんの精神的疲労に大きな関係があることを理解していたから、入院中に押しかけることはより以上の肉体的・精神的負担になることを思い、訪ねたい気持ちを抑えつけていた。病名も知らされていなかったから、永年の過労の結果であろうと想像し、いざれ面会謝絶の解ける日が来ることをねがっていた。ところが六月八日の朝、小林登美枝さん（平塚らいてうの自伝の協力者）からの電話で、高群さんの死を知らされ、呆然とした。

取るものもとりあえず、国立東京第二病院に駆けつけ、監安室に直行した。室の中央の台の上に遺体が安置され、顔に白布をかけている。一方に一段高い畳敷の小さな部屋があって、先客が集まっている。平塚らいてう、市川房枝、浜田糸術、高良真木、熊本から来られた友人（注1）の五人である。浜田さんはすぐ下りてきて、私を遺体の傍に連れてゆき、白布を取って見せてくれた。らいてうも下りてきて、「きれいな寝顔じゃありませんか」と話しかけた。だが私は興奮していた。「なぜもつと前に知らせしてくれなかったのです」と廊下で橋本氏に食ってかかり、こんなことになるなら面会謝絶を無視して押し入ってでもいま一度会っておきたかった。面会謝絶を忠実に守ったばかりに唯一無二の機会を逸してしまった。おれはばかだった……。無念と怒りが渦まいて、私は強く詰めよった。

味ふかく感じた。そのとき私は十日前の監安室ではしたくない振舞を詫びたのであるが、私がまず詫びねばならなかったのは橋本氏だったと分る日が、やがてやって来るのである。

人間の行為を判断するのに客観的という言葉が安易に使われるが、その客観的立場というのは多くの場合、一般的に通用する常識的な立場をいみしている。たとえば私は結婚式を認めない主義で、親友でも親戚でも結婚式には一切出席しないこととして押し通してきたが、客観的にみるとこれはやはり非常論で、人によっては反感を買うおそれがある。そこで私はこれは自分の主義なのだということをあらかじめ説明してもらおうようにとめていた。この程度ならまだ説明すれば分つてもらえる。だが説明したい場合がある。両親が年老いて私の妹と三人きりで暮らしていると、相続者の私がなぜ一緒に生活しないかと、親戚や周囲のものは暗黙に私を非難した。しかし私は親の家に入ろうとしなかった。なぜかと問われても答えられない。否、答えることはできるのだが、それが世間一般の通念を納得させ得ないことを知るがゆえにだまって非難を甘受する外なかったのである。

高群さんを古くから知る人々、また晩年の業績によって認識するようになった人々にとって、彼女はひとりの男の妻である以上に一個の独立した社会的存在であった。それは高群さんの個人的意志や希望とかかわりなく、社会が彼女を獲得することによる必然の結果であった。かれらは彼女の思想なり業績なり人柄なりを通して彼女を共有する。つまり八私たちの高群逸枝として、それぞれの八私的な高群逸枝を形成する。当然のことながらこれは死後に一般化するのだが、生前においても限られた一部の人々の間にそのことが起っていた。とくに高群さんと接触し、健康を気づかたり食べものを運んだりした人々においてそうであった。高群さんの入院

さだめし血相を変えていたにそういない。

橋本氏はいろいろと弁解したが私の興奮は収まらなかった。部屋に戻っても誰ともろくに口を利かなかつた。橋本氏の話によると、四時に病院を出棺し、世田谷の家で遺体を置く。明日は友引で火葬場が休みなので一両日置く。骨にして、当分そのまま。いざれ郷里で葬式。したがって密葬ということにし告別式も葬式もやらない。「それならあなたの家へ行ってもしかたない。ここで告別させてもらいます」

そう言つて私は遺骸の前に立ち、両手を合わせ、頭を垂れた。そして水を打ったような沈黙のなかを靴音を立てて部屋を出、まっすぐ家に帰ってしまった。

「すぐれた女性史の開拓者、高群逸枝は、このようにして、だれにもとられることなく、暗黙のうちに死んだ。ジャーナリズムと関係のない刻苦の生涯。寂しい死。十五年の交友による彼女の数十通の手紙だけがいまの俺にとっての形見となった」
(六月八日)

六月十四日に、平塚らいてう・家永三郎・志垣寛の三氏が友人代表で世田谷の家で告別式をやるといふハガキがきた。橋本氏も周囲の意見を無視できず妥協させられたのであろう。しかし病院でタンカを切つて監安室で告別してきた自分は、いままら行事に立ち会つてもしかたないと思つて出なかつた。

六月十八日にらいてうを訪ねたとき、話が高群逸枝が中心となつた。高群さんが私に会うことをすすめたというところらいてう自身の口から聞いた。いろいろ話しているうちに、らいてうが高群さんをどのように評価していたかも分り、この二人の女性の関わりを興

から死にいたる緊迫した時期にこの意識は露わになり、彼女を占有する夫と対立し、トラブルをおこすにいたつた。私の行為などもその一つだったと言えよう。

だが、たとえ高群さんは一人の男性の占有物ではないという解釈が正しいにしても、それはあくまで第三者の私たちの立場であつて、高群夫妻の立場ではなかつた。この立場の相違は絶対であつて、主観と客観との間に架ける橋はない。両者の価値判断は質的に異っている。自己の立場を固執するがぎり、他者を理解することは不可能なのである。

昭和六年――すくなくとも――以後、橋本・高群夫妻は一身同体の夫婦愛の生活にはいつた。それがいかに特殊な純粋なものであるかは自伝が示すとおりである。あの長期を要する研究も超絶的な努力も、この深い人間的交流と溶合をゆきにしてありえなかつた。このことをいけば理解しているのはいまでもなく当事者である。私たちはただ推測にすぎない。しかし、世俗的快楽や欲望をすててあれだけの研究生活を持続できたのは、ただ高群逸枝の天分や性格だけでなく、研究生活そのものを快楽に化するようなつよい条件がなければならなかつたと私は考える。絶対的な信頼と愛が、他者には辛く苦しいと思われものをよるこびや快楽や生甲斐に感じさせた。この心理的メカニズムを支えるのは抽象的な信頼や愛ではない。現実的な声やまなざしや体臭や接触を伴つた信頼や愛である。それなしには空虚で耐えがたい肉体的存在そのものである。三十余年の歳月はデッサンの訂正の余地がない完成した絵画をつくりあげてしまった。言葉の表現や考え方や動作の癖にいたるまで、いつしかひとつのものになった。分析すれば高群逸枝の休止のない研究生活は、愛の同化をたしかめるための無意識的な作業であつたと言えるかもしれない。

このような夫妻にとって外界は異邦人の世界というよりも無縁のものとなる。自分たち二人の生活が実在であって、外界は觀念にひとしい。時の流れも、生きている実感も、他者との交流のなかにあるのではなく、閉じこめられた森の家にいる。それについて、突飛なようだが私はハックスリとハドソンによって書かれたナンセンの伝記の一節を思い浮べるのである。ナンセンが未踏の偉業を達成して帰国したとき、故国は熱狂的歓迎をもってこの探検家を迎えた。だが彼は当惑し、居心地のわるさをおぼえる。豪華な晩餐会の席上で孤独を感じ、思いを暗い氷の世界に馳せる。偉大な業績によって世間は彼を自分たちの共有財産とみとめ、国民の誇りであることを彼に納得させようとするのだが、それは同時に世間一般のルールに彼を組み込むことである。間断のない握手や賞讃の言葉やその他これに類した歓迎が彼を疲れさせたにしても、彼はそれを幸福に感ずるにそうしないという常論が彼とは無関係に成立しているのだ。だが彼は外界から切りはなされた自分だけの世界をもち、そこで生き、感じ、標的にむかっていた。これこそ彼にとっての実存であり、安らぎの領域であった。

入院という事件によって高群さんは外界に連れ出され、否応なく接触を余儀なくされた。彼女をとりまく人々は医者であり、友人であり、好意や善意で彼女の世話をやいたり慰めようとする人々である。もとより彼女はその暖い気持に感謝する。森の家の生活ですら、どのような人にもいやな顔をみせず相手をよくこぼせようと心を砕いた彼女が、入院におどろき集まった多くの人たちの気持に応えようとつとめるのは当然のことであった。ただしそれは確実に彼女を疲れさせる。自分の家で一度のインタビュでもあと寝こんだりしたほど孤絶の世界に親しんでいたものが、絶えずだれかと顔を合わ

せ、言葉を交さねばならぬ世界に突き込まれたとしたり、心身衰弱した状態では危険ですらある。しかも困ったことに彼女はすべての人をよるこぼせようとする努力を捨てない。人はその微笑や楽しいな表情から、じぶんが会ったことで彼女はこんなにも満足しているのだと思ひ込むのである。

口にも態度にも出しえないために生ずる危険な誤解をもっともよく知るがゆえに訪問を謝絶し、外界の侵入に立ちまはだかつた夫・橋本三はこのときにも彼女と他者との間に立ちまはだかる。相部屋から個室に移し、面会謝絶の札を掲げたのも防衛の一つであった。いわば森の家の生活——そこでのみ彼女は安らげるのだから——にすこしても近づけない、あるいは極端な変化を多少でも柔げたい努力であった。しかしここは世田谷ではない。取り捲くものは世間であり常論である。かつては目に立たなかつたものが露き出しにされ、拡大され、社会的ルールにしたがって判断される。橋本氏は友人たちの善意や好意を無視し、患者と見舞人との間を引き裂く横暴な男にみえる。みんなで努力して入れた病院の相部屋から独断で個室に移した(注2)ことまでが自分たちの好意を踏みじられたようにかんずる。「あの男は高群さんを支配し、高群さんは逆らえずに服従しているのだ」という声まで出る。まさにそれは、死にいたるまでのわずかな貴重な時を、「私たちの高群逸枝」と「専横な頑固な夫」とが奪いあう姿であった。それが数々の誤解を生み、ここでは触れない不快なトラブルを生んだのであった。(注3)

いま私はすべてを総括して大胆に言わねばならない。あのときあつまつたすべての人々——私をふくめて——善意や好意にあふれた人々のすべてが誤りを冒していたのである。もし舞台を森の家に移せば誤解の大半はとける。だが舞台は病院であった。それだけで人

々は高群逸枝が公共社会に手渡されたのだと思ひこみ、そのルールで安易な判断を下したのである。しかし高群逸枝の世界は従来の生活の延長以外になく、いきなり曝された外界の判断は強いられたものだった。外形的な生活の変化は内面生活を変えることはできなかった。彼女は夫とふたりきりのとき、完全看護で限られたわずかな時間の間だけ、生活を取り戻すことができた。

客観的評価をくだす場合に、人はできるだけ公平な立場に立とうとするのだが、それは一般社会のルールに従ってこのようなみかたが成立するのだということをものがたつてにすぎない。生活の真実を知るにはすべての「立場」を捨てて生活自体を理解するしかないのだが、それは書物を通して学ぶような簡単なことではないし、まして高群夫妻のような特殊の場合には至難に近い。すくなくとも最近出たモデル小説にあるような、車に乗せて高群さんを都内見物させたらという発想など、およそ通俗的な立場をまるだしにしたもので理解とは無縁である。

病気になるれば医者にかかり、重態ならば入院する。それができるものは幸いであり、できないものは不幸である。これが社会の原則だ。だがもしそうでないものがあつたらどうであろうか。私は橋本氏の怒りを買つても次のような推測をのべなければならぬ。高群さんも橋本氏も入院については非常なためらいを感じた。必要とは知つても気がすまなかつた。周囲のものにせき立てられて決心は

したが、それはこのような問題で常論に従わざるをえなかつたからであり、高群さんは夫の決心に従うという意味で承諾したのではなかつたらうか。ここを出ることは自分達の世界を見捨てること、世間の常論の支配下に入るのだということをもよく意識し、それゆえにためらつたのではなからうか。私がさききのべた説明しがい場合はこの場合にもあてはまるのではなからうか。社会が理解しえず、当事者だけが理解しうる人間の生きかたの問題である。おそらく病院が完全看護で附添える時間も限定されていることを知つたとき、この夫妻はともに森の家に帰りたいとねがったことであろう。そうだ、そこにのみ真の生活がある。三十余年の歴史が建物の隅隅にまで浸みこんだそこに自分たちの人生がある。そこでは弁解したり争つたり抗議したりせずとも自分たちの流儀で生きることができる。死も同様だ。死そのものがおそろしいのではない。死にいたるまで、なんびとも乱されず、貴重な一刻一刻をお互いの胸に刻むことこそ重要なのだ。しかしこのような生きかたを社会はゆるさない。かれらのためというより人道上の問題として病院に送り込むのである。

私の推測は奇矯かもしれない。だが私自身、完全看護の病院で息を引き取るよりも妻のふところまで眠りたい人間だからこのような発想にとらわれるのである。人生の不幸はだれがきめるのか。愛の深さはどのようなかたちで測れるのか。だれも答えられはしない。

(完)

(注1、熊本から来た友人とあるのは在京の同郷の友人か、あるいは在京の故人の甥だつたらうと思う。—編集室K)

(注2、橋本は入院前日に市川氏に個室のあつせんを依頼し、入院の翌日には同様の文書を面会室で友人たちに渡してたんだ。入院費用の点も用意あることを入院前日に市川氏に告げ前記の文書にも明記した。それが無視せられたから橋本自身が病院側と直接交渉したのであった。「火の国の女の日記」第84章参照。—編集室K)

(注3、いずれ機会をえて、当方の資料を提示のうえ、具体的に事情を述べてみたいと思う。—編集室K)

川名郁子

＊ 謹啓 順調に発刊されております御誌にふれる度、はつと致します。

この騒然たる世の中をのり切る新しい時代の指針のようなものが感じとれるからです。先日沖繩の離島に行き、そこにまだ残っていた自然に抱かれ、高群逸枝のことを考えました。宇宙的視野、長い歴史(時間)のサイクルで、ものをとらえれば、まだ絶望することはない。新しい時代をつくるのは、私たちが、何でもないただの女ではないかと思えました。与那国島などにはまだ母系制の残照があり、女の人が大自然を信じて生々と働いておりました。「性」についてもおおらかに、たくましく語るおばあさんも居り、女のふるさとに帰ったような安らぎを覚えました。

＊ 心新たに、逸枝全集を読み続けます。柳田國男や伊波普猷の民俗学スケールも大きいですが、やはり女の私は逸枝の感性の方がピリピリ伝わってまいります。御誌を励みにして、頑張るつもりです。

＊ なお、住所、変更しました。〈東京〉

＊ 23号の21ページ二段目の一文を発見して

うれしく思いました。私が、今ちょうど読んでいる本が「家」をめぐる民俗研究なので、もつとよく教えて頂きたいので、おたよりしようかと思えます。卒論に志摩の隠居制を予定していますので、先生から読むようにと言われたのですが、私も高群逸枝の見解と違うかと思っていました。民俗学という隠居は彼女の避居にあたるものでしょう。もつと勉強する必要を感じます。ほんとうに勉強しなければ……。

＊ 筆者の住所をお教えくださいませんか。江馬三枝子の「飛脚の女たち」も興味深く読んだので、きつと勉強になると思います。

＊ 先日世田谷の森の家跡へ行ってみました。童公園も想像より分と狭く思いました。私の貧しい想像力では、ここに、アッシャー家といったような森の家があったとはとても思えません。でも、以前からあるらしいこの地になじんでいる木々を見ては、こうやってお二人がながめたのかも知れないのだ。この木の枝を高群逸枝が知っているのだ。いや、この木が彼女を知っているのだ……。白い花の咲く下のベンチで一時間程、さまざまに空想をめぐらしていました。

＊ 東京では、神田の古本屋をめぐりました。神保町の慶文堂書店で、「大日本女性人名辞書」をみつけましたが、¥13,000という価のため、買えず、残念でなりません。

た。「日本女性社会史」を買いました。楽しい旅行でした。〈名古屋〉

＊

南風盛成子

前略 雑誌223落手。高群逸枝研究を指すもの、女性史研究をめざす女性の広がりを知り、大変うれしく思っています。当地の若い姉妹たちが「女性の歴史」を読み始めるとのことです。

＊ 女性解放を様々な角度から見ると、一つの御誌によって得られそうです。文献の紹介は貴重な資料になり感謝です。

＊ 雑誌、創刊号より入手したく在庫についてお知らせ下さい。〈那覇〉

＊

立教大学女性問題研究会

高群逸枝雑誌二十四号をお送り下さり有難うございました。一年間四部宛の購読料として金二四〇〇円を切手にて同封いたしました。今年、高群逸枝さんの「女性の歴史」とライヒの「性と文化の革命」を基礎に具体的な問題に対処し戦っていきたくと思います。今後ともよろしく願います。八月十五日東京

＊

吉泉和賀子

＊ 高群逸枝の著作読研会を2年ばかりしております。雑誌の方がありませんら、追加分をお願いすると存じますが、とりあえず、第十七号から最新号まで、一部ずつ送付願いたいと存じます。

＊ 送金は、金高と、その方法とをお知らせ下

＊ さい。〈東京〉

＊

大石藤子

＊ 机に向かっていただけでじつと汗ばむ暑い日が続いています。

＊ 逸枝の「女性の歴史」とめぐりあって、かれこれ4年になります。アルバイトをしながらようやくそろえた全集も肝腎の「母系制の研究」「招婿婚の研究」には手を出せず今日に至っています。

＊ 今、心にかかっているのは「招婿婚」の読破と、「女性の歴史」を仲間と再度読み進めてゆくことです。昨年の秋以来「女性の歴史」をテキストに研究会を持っているのですが、単なる読研会で終わりがちで、残念ながらお互いの生きた思いのぶつかり合いに欠けているように感じられます。「女性の歴史」をただ読むのではなく、実際の自分の生活を通じて、彼女の心に触れたいと思っています。そして彼女の思いに触れる中で、自分の中にまだ眠っているものを呼びさましたいと思っております。〈名古屋〉

＊

一ノ倉志保子

＊ 前略 ハガキどうもありがとうございます。17・22まで保存用をおゆずり下さること、感謝いたします。

＊ 高群逸枝に関してレポートすることが、私の夏休みの課題となっています。まず人間史からアプローチしてみたいと思、「火の国の女の日記」を読み終えた今、高群逸枝雑誌

＊ が必要ですが。

＊ 貸し出し廃止の件は残念ですが、それは海賊版を待つことにします。〈山梨〉

＊

＊ 石牟礼さんの「最後の人」愛読しています。高群さんにはミコ性格が十分あって、私は兼ねて折口信夫の古代への素嗜らしい直感をつぐ人は高群さんだったのでないかと考え、折口信夫への親しみが無かったことを残念に思っていました。

＊ 高群さんの伝記は、石牟礼さんによって書かれることが最も適当かと思っています。石牟礼さんに期待するのは私には沢山あるのです。私の勝手ですが、私には沢山あるかもしれませんが、高群評伝の中に浮び上る大正知識人としての(いわゆる大正知識人ではなく)橋本さんの姿の中にこそ、男性と女性の問題、政治、思想の問題等の本質を明かす鍵が秘められていて、すでにこの七、八年の間水俣病をめぐる政治の世界の中で地獄の苦海を体験なさった筈の石牟礼さんでなければ得て来ないものがある筈です。それは多分、現在の思想的昏迷やリヴの運動等に新しい光を投げかけるものではないのか……など。

＊ 私が編集室に最初のお便りを差上げたのは「苦海浄土」を読んだ直後で、そこに、政治に関わらざるを得ないであろう石牟礼さんの姿を見ていたまじく思う気持ちを綴ったように思ひ出します。

＊ そのような偉大な苦悩の中をつき抜けた思想は優れた感性に支えられて、物事の本質に迫ることによって、世の心ある男性の目をも開かせて来りました。そのような巫子的知性こそまた、橋本さんの沈黙の底に在る位相の深さををはかることが出来るでしょう。

＊ 水俣を中心とする九州という所は何か大変な意味を古代から荷っている空恐しい所のように見えてきますね。今、河野信子さんの「吉本隆明論」を読んでおります。〈東京〉

＊

三田村明美

＊ 昨年12月、友達に会いに沖繩に行く折り水俣へ途中下車して、墓碑へお参りすることができました。私は秋葉山中腹ということしか知らずに駅に降りましたが、タクシーの方が親切にもいろいろな人から聞いて下さり、墓碑まで行き着くことが出来ました。

＊ しかもお花を持たぬ私に、近くでお花の手入れをしていた方が、わざわざ高台にある墓碑まで登って来て「お花をあげて下さい」と運んで下さりまして、そのような親切な方が多いので、東京にすんでいる私の日常生活がいかにギンギンしているかを思い知りました。

＊ もう墓碑までの道はおぼえなかったので、機会がありましたら再びお参り致したいと思っております。〈東京〉

＊ この欄をいつも拡張したいと思いつながら、この号も頁が足りなくて果たせなかつた。

最後の一人

第十三回

第二章 潮

1

石牟礼道子

五位聲の啼く声が、寒氣を貰いて大野川のあたりからきこえられた。俳諧の例会から含んできた微醺はすっかりきめたのに、高群勝太郎は、骨のうちまでぬくもった血がとくとくと動き出したような感じがしていました。

椅をとった長着の裾をそろえ、正座した膝を中腰にして、囲炉裏の自在鉤の鉄びんをずらしす。潮の匂いをきこうとしているので

沸騰しすぎ、入れすぎたお湯が、しゅしゅしゅと、焔の上にはばれ、灰かぐらを立てました。土間の甕の前から、綿入れちゃんちやんこの上に長い前かけをお角力のまわしみたいにしめて、かがんだ姿のまま林田家のお内儀さんが、薪の火であぶられた顔で振り返ります。

「あら、校長先生、あぶのうございます。いっぱい入れとりませけん」

「いや、あんまり焔のけすぎまして、ちよつと、かき出そうと思ひまして」

「はあ、ほんなこつ。もうそろそろ、潮ものぼってくる頃じゃありませんみやあか」

産室といつても土間から見渡せて、産婦の枕元に屏風がまわしてあるきりの八疊に六疊の二間きり、それに台所がついて、こういう非常のときには、女たちが立ち働きやすいようにふすまなどもなるべく閉めたてないようにするのがこちあたりやりのやり方なのです。

寒氣を割って、つよい潮の香が大野川の根元を音もなく満たして上ります。潮は、密生している大野川の葦の根元を音もなく満たして上り、田んぼの水口水口のあたりまで張りつめて来て、こうこうと暖氣を吐いているこの草葎き屋根の息づかいと合流しながら、あたりいぢめんの田の上に、香氣の流れをつくっているのです。

「ほんなこつ、こういう寒の夜更けにまで、お世話をかけることになりまして」

「なんぼおっしゃられますか。こういうときこそ、遠慮のうお使いはりませんば、わたしども、役なしでございますが」

林田のお内儀さんは、さつき自宅の句会の座でのとり持ちとおなじ手つきで、たかな濱をはさんでさし出しながらいいました。この家で句会から帰ると陣痛が始まっているのでまた使者を立て、お内儀さんは米村家のお内儀さんをとまなつてかけつけてくれたのでした。米村家はこの村に着任のとき滞留させてもらった家で、この両家はすっかり、勝太郎夫妻の世話をもって任じているらしく、お内儀さんたちは、つねのとときよりも、なんだか声音さえ生々と聴めいて、甲斐々々しく立ち働いていました。

おなごというものは不思議なものだ、と勝太郎はおもうのです。こういうたぐいの、冠婚とか、出生とか、葬祭とか、つまり、部落の非常のたぐいのときには、なぜ、働きぶりが、華やかにさえるのだろうか。

「あ、はいはい、じゃ、そっちの手あぶりに移しましゅ」

「わたしがやりましゅ、こぎゃんた、おなごの仕事でござります」

お内儀が甕から立つて来て、手あぶり火鉢をひきよせました。それから、息づかいがせわしくなつて来た産病人の方を見やります。

「先生は、産病人さんの方にどうぞ」

「こつちの釜の方も、わんわん沸ります。二人でん、三人でん、お生まれなはつてようございます」

米村さんのお内儀さんが大声で、漬物の小鉢を抱えたまんま土間からそう云うので、おだやかな勝太郎も、陣痛のさ中にある登代子も、つい笑ってしまいました。

「あはは、なんしろ、無事に生まれてくれさえすりやようございますが」

「無事お生まれなはりますとも」

ふたりのお内儀さんたちは確信をこめてそううなずきあいました。「よか息づかいでございますばい、あなた」

前任地の御所あたりは山間の村で、たしかに村の人々も篤実で情愛もことに深かったのに、ここ益城平野もずっと海つきの豊川の人びとは、さらにもっとくだけて、うらうらとしてるところがある。不知火の波に洗われて、開明的なところがあつた。

勝太郎は、ひよつとして、今度の子は、無事に、育つのではあるまいかと、湯気の立つ中で、土間を掃ききよめたり、あいまに、産婦の手を握りにあがつたりしてくれているお内儀さんたちの姿をみているうちに思いました。不思議な、安らぎの予感が、そのときしたのです。

このくだりの岬泉日記には、そのような落着き感が感ぜられるのです。

明治二十七年一月十七日 晴

当夜ハ林田為八方へ膝廻リノ開点ニ付赴キ十時三十分頃帰家シタレバ静江少々産氣付キシニ付、直ニ米村和三郎方へ到リ人ヲ雇ウコトヲ依頼シテ帰家ス。依テ同人方ヨリ二人ヲ雇イ来リシヲ以テ、松橋町産婆方へ遣ワシ、跡ニハ和三郎妻及ビ林田ノ妻等来タリテ種々手伝ウタリ。

然ルニ、産婆来リテ一時間許ヲ過ギレバ、安ヤト分娩、女子出生セリ。依テ飯二名ヲ重尾ト命ジ、各産飯ヲ含ンデ後、産婆ハ前二人ニ連レラレ帰散ス。余等ハ林田妻、和三郎妻等ト枕ニ就ク。時ニ午前三時頃ナリキ。

「静江少々産氣付キシニ付——」などと自分がつけてやった雅母で妻を記しているところは、いかにも岬泉日記らしい。

すでに男児三人を死産させたり、出産したあと、まもなく死なせてしまっている妻登代子は、日記の上では「静江」という雅母でお

産にのぞみ、赤んぼを産むことになる。現実の暮らしから、一生、ほんのすこしばかりのいじらしい遊行を試みつつける性癖から、福泉日記は成り立っています。福泉とは勝太郎の雅号なのです。

肥後藩武道師範家や、熊本の大寺延寿寺を統べる字僧や、郷土層の血を混入しているような家系に、正統的に伝わっていた漢学の素養を持ち続けた血統が、明治変革の洗礼をうけ、さまざまな階層分化を萌芽しながら近代庶民となってゆく過程が、この日記の性質と文体にはあらわれています。このような、家の日記を残さしめる家系から、高群逸枝が産み落とされるのです。典型的な、夢みる近代的遊行者として。彼女の好きな言葉でいえば、真の意味の放浪者が、むべなる生涯というべきでしょう。

ひとつのながい家系が、時代の養分を吸収しながら自己淘汰をくり返しつつ、ある時期、結実にむかうことがある。形にあらわれよう、あらわれようとする系と、消滅にむかいたがる系とがあざないあってゆく生命系の不思議のひとつに感嘆して、わたくしはこの日記の短いくだりを眺めます。血の鼓動の不思議ともいべきものを、彼女の文章のみならず、その父の日記にすてきにくくのです。

妻のお産の場面を記すにさえ、静江なる雅号をもつてするのは、ふつうの意味の庶民の表現ではすてきになく、表現そのものがそなえている自意識が芽生えていて、この両親から生まれ落ちる逸枝には、まれなる表現者としての結晶度となって受け継がれ、父母の志は逸枝によって完璧に果されました。

真宗異安心史上の巨僧月感を中興の祖としている延寿寺、その弟子から西本願寺派の講字（字長）を出したりして、学問に縁の深い大寺の学僧の娘であった逸枝の母登代子。その父、すなわち祖父大津山自隱は、宗学のはかに老荘にくわしく、系譜学や国文学にも造詣ふかく、「大昏車をもつていて教誨をひらいていた」と逸枝は記

しています。

登代子は、時代のならいで、意識的には二人の兄たちのように正規の学問こそ、父からさずけられませんでした。兄たちとならんで、結構、漢書など読みならい、そのような穿鑿気の中で育てられ、嫁してからは、これまた学問好きの夫勝太郎からあらためて、字さしをもつて「外史」「十八史略」「四母」「通鑑」などという類を教えられ、漢詩、和歌、俳諧の作法や洋算、四則雑題等を学ばせられたたちまちこれを消化して、のちに夫のかわりに教鞭をとることも出来たというのですから、いまだきの、単なる知識さえ身につけえぬ、女子短大出などの比ではない、かなり高度な教養人の夫婦でした。

ほほえましいことにこの夫婦は、ふたり共著の漢詩集や和歌集までつくっていました。明治中期の片田舎に、こういう夫婦がいたとは自分を離れて考えてみても驚嘆に価するが、それが、なにげない日常の暮らしの日々であったと、逸枝は、自分の家系のことを誇らかにうたっています。昭和期に入って出生し、小学校に入るまで学問の字はおろか、文字というもののかけらすら見たことさえなかったわたくしなどの生い立ちとくらべると、雲泥の相違というべきで、ただただ瞳目のほかはありません。それがなんで彼女の評伝などにとり組む気になったのか、志向としては消滅型に向かっているわたくしの自覚がそうさせる、というよりはかありません。

ともあれそのような夫婦が、観音さまに願かけして、初観音の縁日の正月十八日に逸枝は出生し、聖観音の申し子として待遇されて育ったといえますから、彼女は出生のはじめから、すでに知的意識界、認識の世界に自覚づけられて出生したことになります。もともとよきらしい資質にめぐまれて。母の登代子はその愛子を美稱して、みずから「かぐや姫」と稱んだと逸枝はいます。逸枝が終生、

生命界への使命感と、深度の深いナルシズムから醒めなかつたことは、出生のときから運命づけられていたといえるべきでしょう。

五官のすべてが、官能的極限まで、やわらかく生まれついていた彼女のもうひとつの本性、度外れた虚無感などを教うには、使命感やナルシズムは、なによりも有効な、自己救済法でした。彼女は、自己救済の天才で……、自伝の書き出しには、

「私はこの世に歓迎せられて生まれて来た」

とあります。圧倒的なつつましきでそう書いています。この一説になげない書き出しは、生命自体へのつつましきから発しているのでしょうか。そしてまた、この世の秩序と、バランスをとりえたもののゆとりからも、発せられているように思われます。

そこで、著しく、この世の秩序とのバランスをとりそこなうて失速止むことなき筆者は、彼女に関する下調べにかかる前からもう本能的な失墜におちいり、逆さのぞきをするような世界が現出して来て、おそらく通常の評伝など書けないことを告白せざるにはいられます。この世にある無価値なもの原型に、よりひき寄せられつつあるわたくしが、価値あるものの典型のごとき彼女の世界を知ろうとするのは、バランスをとりたいのではなく、あるとき灯る、自分のまなこの色を、その色でうつし出されるこの世を、わずかばかり、みてみたいからにはかなりません。彼女のまなこの色で見たならばこの世はどう見えるのか。生命が試みる教養とやらを、せめてもの風流に試みてみたいだけにすぎません。

逸枝の幻視した時代はすでに終り、わたしたちの時代は、まぼろしをさえ見ること出来ぬ時代に突入しました。結実不可能な、ひびわれの深い愛を抱きあって、それを連帯と呼ぶしかない、儚ない生命の時代がやって来て、女の解放などいえば、もうとたんに男たちも父子家族などといわれてきまよう姿の、あわれな時代になりまし

たことか。彼女は、そのように認識せざるをえないわたくしたちが見た、最初にして最後の幻視そのものでもあるのです。逸枝ブームとやら起きて来て、われひとともに、女たちが脱ぎすてて往き来する感性の瓦礫のようなものを、むざんにおもいながら、生命との出遭い、文学との出遭い、思想などというものと出遭い、人間との出遭いなどをあらためて眺めようとするれば、出遭いの不幸の面が、より気にかかります。人間史の罅のごときものが。

彼女は、そのようなものを、光の中にひき出して、なにかを、解化させようと試みました。間にあうのでしょうか。より解体しながら沈む罅の時代に。

さて、その志にしたがって、また明治二十七年一月半ばすぎの肥後、益城平野の片隅の、寄田の森。その森の大銀杏から眺められる豊川村のあけ方にもどりましょう。

松橋町から連れて来られたお産婆さんは、なかなか睡気がさめない風でしたが、腕だけは、子添えの技を発揮してくれ、福泉日記は、

「一安々と女子を分娩す」と記します。

死産であったり日立たなかつたりであったものの、もう三児を産んだ経産婦でもあったので、さいわい、安産のはこびともなったのでしよう。けれどもこのお産婆さんは、会釈のない強のものだったとみえ、睡魔のあいだから、遠慮なく生あくびしたついでに、赤子を取りあげながら、

「あら、ビキの子のごたる」といい放つてしまいました。

さすがおっとりした産婦の耳にもこれはききとられてしまいました。ビキとはすなわち蛙の方言で、このとき事前に、切実な観音信仰

を産婦が持つていなかったならば、待望久しい第四子の出生時に咳かかれたこの言葉は、相当に奇異な言になる筈でした。まるで悪意というもののない登代子の性格から、一応びつくりはしたものの、なにかしらそのような表現は、家系になじまぬ粗放な階層語として、聞き流しにされたと思われず。

「若い母をびつくりさせ、のちにそのことを母が笑って話してくれた」と彼女もさりと奪いてはいるものの、この親娘には、ある種の痕跡として、お産婆さんの言葉は残りました。

「ビキの子のこたる」

といわれた話は、のちに逸枝が、小学校にあがってから、「黒猫ちゃん」と級友たちにあだ名されている、いわば醜い女の子に出遭ったとき、複合した原体験として彼女の中に甦えります。彼女は、そのような級友たちの動向に対して流れ狂っているその黒猫ちゃんに内心同調もして、なんとか、

「自分が観音の子であるが、またビキの子でもあることを、知らせようと思って努力するのだった」

けれども、この「最初の菩薩行」は水泡に帰し、黒猫ちゃんはますますひねくれて行ったと回想しています。このビキの女の子と黒猫ちゃんとの出遭いを土台として、後に彼女は、自己の恋愛過程の経験をもとにして、恋愛論の中に独特の「美醜論」を展開してみせました。

どのような一生といえども、ひとつの生命の出生が、この世の真相というものに、もう、まるまる出遭ってしまうことの、劇的一瞬を、わたくしたちは、「聖観音の申し子」とする両親の願望と、「ビキの子のこたる」とみる純客観的な、赤の他人のまなこの中に見ます。

そのように観念されている双方の世界を対応させることにより、

こまかもんですかねえ」

「お産の、もやすうにあんなさつたつが何より。親孝行さんであんなさる、なあ、嬢さま」

米村さんのお内儀さんは、もう赤子にむかって語りかけています。彼は、産室の隣に座って墨をすりはじめ、半紙をひろげて、たっぶり墨を含ませました。重尾、と替きあげ、

「どうだろう」

と、いまはふたりとなっているその足元の方から示してみせました。利発な妻はその意をさと、

「よか名でございます」

あとは微笑で答えて、これも試ききよめられたらいきなみどり児の上になんざしをうつつしました。重尾とは仮の名で、これまで、この世にえにしのうすかった子たちの代を終りにする、という意味の仮の命名。

明日届を出して休んで、あらためて、観音さまにあやかる名前をつけて届け出そう。なにか敬虔な愛が、湧いてくるのを勝太郎は覚ええます。

「今日は初観音のご縁日でございますか」

彼女がその天才的逸脱を抑制しようとしている形跡は著明で、天上的と夫感三によって名づけられた賃賃に、彼女なりの鑑録を、みずから下すことができたのでしよう。

寒夜にやって来た農婦のお産婆さんの詞は、たぶん、地の使いの詞だったのです。

ともあれ、出生の夜は、あけようとしていました。勝太郎は外庭に出て、草葺き中二階の飯のわが家をふり仰ぎ、「明日は休暇届を出そう」と思っています。明日は一日中、そばについてやろう。

急に、前任地の御所で、この妻を雪の中に追い出した夜のことになり、胸がうずき出します。

さつき、産声をきいたあとしばらくして、産室に招かれて行ってみると、登代子はお内儀さんたちに拭いてもらって、ひときわ浄らかにしつとりなった額の下から、うるおったくろいまみで夫をみあげ、

「女の子でございますよ」

とその眸で云った。

「ああ、産声でわかった。やつぱり声からして、違うもんですねえ」

勝太郎は、お内儀さんたちにいかけるように答えました。

「こんだはお嬢さまであんなさるけん、きつと日立ちのようあんなさる」

お内儀さんたちは、さつきのお産婆さんの失言をとがめる意味をこめて、

「紅太郎人形のこたる、小愛らしか嬢さまじゃ」

とこどもも云います。紅太郎人形とは切り下げ髪こむぎの姫人形のことでした。

「はあ、おなごの子というもんは、なりからして、ごげんも、

「ほんなこつ、いま、そげん思ひよつた」

お内儀さんたちももれきいて、「縁起のよかお子であんなさいますなあ」と喜色の声をあげましたが、夫婦の胸にだけ通いあうおもいが湧いて来て、もう炎が消えかけて燠だけになったいろりから、それでも釜の音が、しゅんしゅんと快よいひびきを立てて来ます。妙なるその寝姿を眺めているとまたしてもあの雪の夜に、生まれてまもない第三子の義人を袖でかこつて、雪の中に立ちつくしていた登代子の姿がもうひとり、遠くちいさく見えて来て、突然、神々しいものに出逢ったように、彼はぶるつと身ぶるいして、うつつの目の前にある登代子を見直しました。

お産婆さんと、そのつけびとを送り出しに外に出ると、かんかんとした月明が、不知火海のうえのはしにかたむき、玲瓏な寒夜でした。その夜空に、切り絵のようにはめこまれて、大野川の堤の、榎の裸木が梢のあいだに、大豆の粒のような実をひと塊ずつ光らせています。潮のひきはじめてた河原の葦の間から、羽づくろいをする五位

鷲の羽音がまたきこえました。

「明日は、だいぶ、霜のきつかもしれん」

そう勝太郎はつぶやきました。

天の魚 石牟礼道子 ¥1500円

東京都千代田区神田小川町二一八
振替東京四一一三

筑摩書房

渋谷定輔評論集 大地に刻む

「農民哀史」の周辺 ¥1800円

東京都千代田区丸の内3-1-3

新人物往来社

秋山洋子・桑原和代
山田美津子訳編

女のからだ

性と愛の真実 ¥1200円
ハポストーン「女の健康の本」集団

千代田区神田神保町一の一五二

合同出版

